

二次元ドリーム文庫 / PDF立ち読み版



お嬢様
メイド部
僕が顧問でご主人様!?

小説 犬熊狸喜
挿絵 高浜太郎

プロローグ	入学式で退学！　そして……	006
第一章	お嬢様学園での新生活	016
第二章	百合奈の気持ち	060
第三章	静香の宝物	103
第四章	本当のキララ	147
第五章	「ウサギ捕まえ」の森で	190
エピローグ	そしてメイド部は……。	246

登場人物紹介

Characters



ほうおうみょういん きらら
鳳凰妙院 輝良裸

聖光嬢女学園二年生。「世界の中心は自分」と言っただけで、超お嬢様。色恋沙汰にはちょっと不器用。



てんじょうだいらしずか
天上平 静香

聖光嬢女学園二年生。輝良裸の親友。感情を表すのが苦手だが、実は他人に構って欲しい寂しがり屋。



さくらさかした ゆりな
桜坂下 百合奈

聖光嬢女学園二年生。おっとりした性格の眼鏡っ娘。三人の中では、世俗に関して一番物知り。



みさきな た
岬 七太

小柄で痩せているが、整った面立ちの少年。苦勞人で優しい。

「ご主人様……なんて、愛らしいのでしょ……♥」

不意の声に、薄く目を開ける。メガネ越しの大きなタレ目が、艶に潤んでいた。勃起を挟む双乳がタプタプと揺れていて、先端の媚突は朱味を増して硬化している。

視線を受けると、薄く湿っていた少女の肌が、更に濡れた。ペニスへの往復刺激も、吸い付く刺激からヌルりと滑る快感へと、変化してゆく。

——るむにゆ、すりゆしゆりゆ……ちゆるるりゆ、むっちゆするり……
奉仕の速度がわずかに上がると、更に吐き出したい欲求が刺激される。

「ゆっ、百合奈さん……このまま、では……！」

出したいのに出せない。そんな、「おあずけ」にも似た状態だ。上下往復の度に、勃起はピクンと跳ねて、先端にも透明な液球が出来ていた。

(もっと……刺激して、ほしい……！)

性感の欲求だけに、脳が支配される。

そんな、視線の訴えを感じ取った、メイド少女。

腰のリボンに両掌を添えると、衣装の留め具をシユルつと解き始めた。

「ゆゆっ、百合奈さん……っ!」

七太の声に、少女は恥ずかしそうに視線を落とす、頬を真っ赤に染めている。
——するしゆる……すとん……。

眼鏡っ娘メイドは、ミニの衣装をひざまずく足下に落とした。

豪華な椅子に腰掛ける下級生ご主人様の目の前で、下着姿となった百合奈。魅惑的に発達した白い肢体が、羞恥で薄く桜色に染まっていた。

初めて、女性の肉体を目の前にする少年。視線が釘付けにされる。

ウェーブの掛かった髪に包まれた、ベビーフェイス。細い首から、なだらかな肩のラインが、とても綺麗だ。

上流階級という言葉がピッタリなほどの、豪華な下着は、上下お揃い。

縁には美しい刺繍が丁寧に施されていて、少年の目から見ても、高級下着だと解った。色は、鮮やかなレモン色。

小玉スイカほどにも実った乳房だけが、ブラからこぼれていて、とても扇情的だ。

上半身から綺麗にカーブを描いてくびれるウエストと、細いウエストから見事に発達して広がる、少女腰。

お腹には、下着と同色のガーターベルトが巻かれていて、衣装のストッキングを留めていた。ショーツはガーターの上から穿いていて、正しい着け方かどうかはともかく、見た目にも、すごくエロティックだ。

女体の描く魅惑的なラインを、極限まで扇情的に高めたような、百合奈の綺麗な肢体。

「百合奈さん……綺麗……」

「思わずこぼれた言葉に、下着姿の少女はニッコリと微笑んだ。

「この上に座る非礼を、お許しください……ご主人様」

そう言つて、春の陽のような微笑みを浮かべると、自ら身体を離し、テーブルの上にお尻を乗せた。白いお尻が、ぷるむ、と柔らかく震える。

下腹部の、更に恥丘辺りをムッチリと包む、レモン色の下着。百合奈はお尻をモジモジと動かすと、腰の左右に指を当てる、ゆっくりと下着を下ろし始めた。

ヒザをぴったりと閉じ合わせたまま、少女のランジェリーが足首から抜かれる。

……するり……ぽと。

百合奈は豪華なショーツを床に落とすと、両掌を脇にくつつけて上体を支えた。ヒザを合わせたままツマ先を開き、少年の腰、左右に着ける。

「こ、ここから先は……ご主人様に……」

頬を染めて、ややうつむいて、まつげも声も震えている少女。

(僕が、百合奈さんの、脚を……)

思わずコクリと息を呑んで、目の前で閉じられるヒザに、掌を添える。

「あ……は……」

そつと力を込めると、わずかな逡巡と共に、百合奈の秘処が目の前に晒された。

「百合奈さんの……」

(あそこだ……)

初めて目にした女性の秘処。そこは桃色に色付いた、綺麗な潤いの肉間だった。

左右の筋肉に挟まれた、数センチの長さの細い柔すじ。少年への奉仕で媚熱を帯びていたのか、うっすらと桃色粘膜を覗かせている。

割れ目の上端には、包皮から頭を見せている、濡れた肉色のクリトリス。肉芽からは、極薄の髪が割れ目の内側へと、花弁を象っていた。

顔を近づけると、ふわ髪のメイドは更に羞恥し、それでも大きく脚を開いてくれる。視線に反応したかのように、秘唇がめちゅり…と開いた。

「あん……そんなに、近くう……」

開いた女性器は、新たな恥蜜をトロリとこぼす。薄い髪の間には、朱い粘膜が柔らかかそうなシワを描き、プクンと小さな尿孔も見える。

尿孔から二センチほど離れた場所、割れ目の後端には、よく見ないと解らないような、潤った小さな肉孔が確認出来た。

(も、もしかしてココが……)

その更に後ろには、シワを集めた肛門がある。やはり、この濡れた窪みのようなトコロが、腔孔らしい。

初めて目にする女性器を、食い入るように見つめる七太。まるで、一瞬でも見逃すのが

惜しいかのような、不思議な独占欲まで湧き起こってくる。

男性本能が、早くココに入りたい、全てを放ちたい、と、肉体を強く突き動かした。

「百合奈さんっ——僕っ……！」

「はい……全ては、ご主人様の、意のままに……」

メイド少女はテーブルの上に仰向けになると、両手を広げてご主人様に身を委ねる。

（百合奈さん——このまま……！）

初めてのセックスで、緊張と焦りが脳内を駆け回ってしまう。急ぐ七太はペニスを掴むと、さつき確認した濡れる腔孔に、先端を押し当てた。

「んっ——」

上級生の少女は、わずかに痛そうな反応を見せるものの、すぐに瞳を潤ませて、年下ご主人様を抱きしめる。

「どうぞ、ゆっくりと……あふん」

導かれるまま、七太は抱き合わせた肉体を前進させた。ペニスの先端から、熱い女孔へと少しずつ侵入してゆく。

——つぶぶ……ぬるちゅ……

肉棒が埋められてゆくに従って、百合奈の表情にも苦痛が表れる。

「はあ……あは……っ！」

亀頭部全体が膣孔を抜けると、絞られるような締め付けが、行き止まりのようにパツンとした張りを感ぜさせた。処女膜——。

「ゆ、百合奈さん……初めて……」

そう意識すると、本当に自分でいいのか、なんて考えてしまう。そんな少年に対しお嬢様は、苦痛の中でも優しい微笑みを魅せてくれた。

「ご主人様……いん……どうか、このまま……」

望んでくれている。そう思うと、これ以上苦しませたくないと、決心をする。

「百合奈さん……んくっ」

百合奈の笑顔に従って、七太は一気に肉体を前進させる。

その直後、薄いゴム膜が破れるように、百合奈の内部で何か弾けた。

——っぴっ！

「ひんんっ——！」

少女の背中がキュっつと丸まり、背中を強く抱きしめられる。

（僕は、百合奈さんを……！）

今この瞬間、七太は百合奈の処女を捧げられて、初めての性交を体験した。

純潔を捧げてくれたお嬢様に、深い愛おしさを覚える少年。

少年とメイド少女は、わずかに見つめ合う。弾むような口づけを一度だけ交わすと、更

にペニスを奥まで侵入させる。

恥蜜と一緒に、処女の証が綺麗な鮮血となって、一筋流れた。

「すごい……中は、キツくて……ぬるぬると熱い……っ！」

根本まで突き込むと、震える少女の唇から、はああ……と切ない息が漏れる。

「んん……全部、入った……」

熱い膣壁が、フワリと柔らかくペニスを抱きしめる。もう少年の性衝動は、じっとしてなどいられなかった。

「——百合奈さん……僕……っ！」

「はい……好きなように、私を……♥」

濡れる眼差しを受けた七太は、抽送を開始した。

——つぶちゅっ……にゆるちゅぶ……。

最初はゆっくりと全身を前後させるものの、肉体は本能に従うように、すぐに動きを変えてゆく。

全身運動から、腰を中心とした抽送運動へと、身体が勝手に移行する。ペニスに絡みつく壁で狂わされるように、突き上げも次第に速まった。

——ぶつちゅ、ちゅぶ……つぶちゅぶっ、によつちゅぶつつゅぶっ！

「あうっ、あああっ——はっんふっ、ご、ご主人っ——様はっ……んはああ……っ！」



突き上げの速さが増すと少女の表情から痛みが薄らぎ、代わって、焦らされるような切ない色が表れてきた。

眉根が下がり、まぶたを薄く開けたまま、苦しげに息を吐いている。肌には霧を吹き付けたような汗が浮き、突き上げられるままに、巨乳がプるたぷりと盛大に弾んでいた。

〔百合奈さん……こんなに、可愛いくて……〕

男性の持つ、女性を守りたい本能が、強く刺激される。

ペニスを包む熱襷は、根本まで押し込むと、固い勃起をゼリーのように柔らかく受け止めて、ギリギリまで引き抜くと、吸い付くように全体を締め付けた。

しかも膣壁全体は細かい無数の襷に覆われていて、肉棒の全ての箇所を存分に愛撫してくれる。

もうこれ以上、放出の欲求を抑える事なんて、出来ない――。

少年は自らの本能に従って、射精へのスパートを掛けた。

「百合奈さんっ、もうっ……!」

「はいっ――いひああっ……!」

――つにゅつぷつぢゅぷつ、りよぶにゅぶぢゅぶるっ!

突き上げられるメイドの巨乳が、タブタブと左右逆の円を、大きく綺麗に描く。抽送するペニスは、柔らかい受け止めと吸い付く締め付けを、数瞬ごとに味わわされる。

「ああっ、はひいつ……ごしゅじん、さまあっ……！」

少女の肌が更にながし、抱きしめる腕が小刻みに震える。腰打つ七太も、意識が下半身へと集約されてゆく。発射に向かって、腰奥の力が圧迫される。

(もう、イク……！)

ギョッと閉じたまぶたが熱く、周りの音が耳から消える。腰が震えて、一段と強く深く、腰を打ち込んだ。その瞬間――。

――づゅぷんっつ！

「んくっ――！」

「ひはあああ……っ！」

七太と百合奈は、同時に絶頂へと達していた。

「はああっとなっ――あなた、さまあっ……！ イッイっちゃっ……はくうううううううううう……！！」

強く背中を抱きしめられる。同時に、根本まで挿入したペニスが、リズムカルに締め付けられる。

(し、しまるっ――でるっ……！)

そして七太は、初めて女性の胎内に、精を放った。

――っつどぶピゅううううううっ、びゅううつとプびゅーーーっ、どぶつごぶつ、コ

ジとためらっている少女。

「あの……場所を変えて、よろしいでしょうか……？」

「？……はい」

ダイタンにも、この格好で部屋から移動するのだろうか。お嬢様は少年の手を取ると、そのまま廊下とは違う扉まで導く。

そして開かれた扉の向こうは、なんとバスルームだった。

「すごい……ここは、キララさんの部屋のバスルームなんですか？」

「はい」

自分の部屋に、専用のお風呂がある。しかもお風呂は寮の個室よりも広く、天井はガラス張り。おそらくボタン操作で開くうえ、周りの壁もガラス張りだ。

湯船は三メートル四方もあり、床も湯船も天然のヒノキでよい香り。

キララの部屋は三階にある。その高さからの景色は、広大なガーデンや手入れの行き届いた緑や花々が、遠くまで広がっていて壮大だ。

「……まるで、本当にお城みたいだ……」

確かに、この空間で生活しているお嬢様なら、あの寮の部屋を手狭だと感じてもしかたがない。

ここで七太は、一つの疑問を感じた。

「あの……部屋から直接、湯船でしたけど……脱衣所はないのですか？」

「はい、いつもは部屋で全てを脱いで、そのままシャワーを浴びますので」

（……部屋で全裸のキララさん……）

そんな姿を想像してしまうと、ズボンの中で変化が起こってくる。

（か、かつこ悪いかな……！）

さり気なくごまかそうとするものの、アヤしい仕草は、すぐにお嬢様の目に付いた。

「あ……！」

一瞬目を逸らした少女は、何かを決意したように、七太の前にひざまずく。

「ご、ご主人様の、全ては……メイドである私が、いたします……」

七太は、下着少女の手によって、衣服を丁寧に脱がされた。

（お……女の子に脱がされるのって、やっぱり恥ずかしいな……）

シャツもズボンも、次々と脱がされてゆく。パンツを脱がされる時だけ、少女は恥ずかしげに、顔を足下に向けた。

全裸にされて、シャワールームの椅子に座らされる。椅子といっても、寝転がれるほどに広く、木で出来たシングルサイズのベッドみたいだ。

「では……わ、私も……」

今度はキララが、目の前で下着を脱いでゆく。背中の中のホックを外して、ブラを取る。解

放された乳房が、ブル…と揺れた。

「やん……っ」

胸を隠そうとして、しかし桃色の小さい乳首が、チラリと見える。ブラを外すと、今度は恥ずかしそうに身体を横に向けて、ショーツに指を掛けた。

横からでは秘処は見えないものの、お尻を突き出す脱衣独得の姿勢は、とても妖しくて美しい。

上体を反らして胸を突き出し、肢体を少しだけひねり、片足ずつ下着を抜く。ヒザを曲げると、セクシーなフラミンゴのような、長い美脚での片足立ちになる。

(こ、これはこれで……エッチだなあ…)

まるで、お嬢様が七太のためだけに見せてくれる、プライベートなストリップショーみたいだ。本物は見た事ないけど。

右手で器用に乳房を隠しながら、ピンと伸ばした左手だけでショーツを降ろす。緑の庭園を背景に、背中を反らしてお尻を突き出し、ヒザを曲げて脱衣をするキララ。

「お、お待たせ…：いたしました…：」

下着を外すと、極力さり気ない、という風に、両腕で身体を隠す。身体の正面を向けても、恥ずかしいのか、視線を逸らしたままだ。

「『気を付け』をしてください」

「……っは、はい……」

ご主人様の命令を受けて、数瞬のためらい。そして赤髪の少女は、両目をキュッと閉じて、両腕を脇に付けた。

キララの裸身が、七太だけに公開される。

双乳の先端は、少年の視線を受けて、桃色に朱が含まれ始めていた。見つめていると、ツンと硬化してゆく変化が解る。

下着を外された下腹部は、柔らかいラインを描きながらも引き締まり、少女らしいツヤツヤな張りを見せていた。

そして、ぴたりと閉じ合わされた、少女の秘処。肌は剥きたてのゆで卵みたいにツルツルで、合わせ目は奥に向かつて、朱味を強めている。

薄く着衣しながらも、隠したい箇所は全て見せている、美しいボディラインの少女。

今のキララは、メイド衣装のカチューシャと、襟とリボン、両腕の長い手袋とカフス、更にガーターベルトとストッキング、のみという、全裸よりも恥ずかしい半裸姿だった。

まるで、最高級の少女娼婦。しかも超お嬢様自身が、七太のために望んだ娼態。

「あ……はあう……」

今の自分に、自身も官能を覚えているのか、ついた息にも、既に艶が含まれている。

ご主人様の視線に、全身を使って楽しんで貰った赤髪少女。次に、プライベートメイド

としての、務めを果たす。

「では、ご主人様……失礼いたします…」

シャワーを手に取り、しぶきが跳ねないように気を付けながら、適温の湯を少年の身体に掛ける。

「わあ、あつたかくて、気持ちがいいです」

「……うふふ…」

そんな何気ない会話で、キララにも少し余裕が生まれたようだ。ポニーの半裸メイドはシャワーヘッドを床に置くと、ボディソープをいっばい手に付ける。

「こういう風に、するのですよね」

そしてフワフワの真っ白い泡を、自身の身体にタツプリ塗ると、背後から七太の身体に抱きついてきた。

—— ふわぷるりゅ…。

「うわひゃ…！」

柔らかくてヌルヌルの感触を背中に受けて、思わずミョーな裏声が出てしまう。そんな声が、更にキララを楽ませた。

「くすくす、ご主人様ったら…」

イタズラっぽく笑うと、更に肢体を密着、少年の背中を抱きしめて、もっと乳房を押し

付けてくる。温かい女体の体温が、無上にエロティックだ。

「や、柔らかい……です……っ！」

キララの乳房は、適度な張りの水風船のような、最高のパン生地のような、不思議な柔らかさだ。更に左右の先端も、プクンと固い感触を背中に伝える。

泡を纏って密着しながら、ヌルヌルと滑る女体の肌は、エッチで気持ちいい。

「ご主人様……今度はもつと、上手に致しますので……」

思わせぶりな事を言うのと、メイド少女は自らの肉体を上下させ始めた。

——ぬるりゆ、つるぬゆる、ぷるりゆる、ぬゆるるぷぬる……。

「わふふっ……き、気持ちいい……っ！」

ふわふわの柔らかいバストで、背中を洗って貰っている。女体特有の皮下脂肪が、官能的に肌を滑る。男の本能か、女体が触れる背中に、全神経が集中させられる。

少年の反応が嬉しいのか、お嬢様は更に、両手をヌルりと胸に這わせてきた。

「こういうのも、いいのですか？」

アワの溢れる両掌が、七太の胸を縦横に滑る。全身にアワを広げられながら、指先で乳首を撫でられ、掌全体で、お腹や下腹部を愛撫される。

——ぬるりゆ、るりゆぬりゆ。

ギリギリな場所にまで指先が降りると、心臓がドキッと高鳴った。無意識にも、少女の

腿に両手を添えてしまふ。

「キ、キララさん——そんなに、されたら……！」

「私の身体……そんなに気持ちいいですか……」

そう問いかけるお嬢様は、とても嬉しそうな、輝く笑みを浮かべている。

一方で、直で女体に密着されて、ソープまみれの温かい肌で愛撫までされてしまうと、少年のペニスは更に血を集め、ビクンッと跳ねた。

「ひゃっ……ご、ご主人様のっ——すごい……！」

耳のすぐ隣で、声が出た。どうやらキララは、背中越しに七太の勃起を見たらしい。

初めて見た男性器に、羞恥しながらも目が逸らせない、といった動揺が窺える。

「こ、こんなに——あっ……今、いたします……！」

わずかに見惚れると、少女は七太の前にひざまずいて、ご主人様の泡をシャワーで流す。

男性器は特に念入りに、湯を当てながら、ためらい震える指で、優しくマッサージ。

フワフワの掌で、触れるか触れないかの優しいタッチで、固い勃起を上下に洗われる。

「とても、固いのですね……それに、熱い……」

初めて触れる男性器に、驚きを隠せない様子だ。無意識なのか、わずかに腰をモジモジさせている。

プニプニの細い指で撫でられると、焦れたい触れ方に、性欲求が高められてしまふ。

(て、手で触られるのも……いい感じ……！)

少女の、泡が消えた掌のスベスベ感覚も格段に気持ちいい。このままでは、すぐにでも射精に導かれてしまいそうだ。

少年の全身を綺麗にすると、半裸のメイドは、新たな奉仕を始める。

「えっと……確か、本では……」

「あの、キララさん……」

開脚させられた少年の脚間に、お嬢様の豊乳がムチリと入り込む。両掌で乳房を持ち上げると、天を向く野太い勃起を、谷間に挟み込んだ。

「こう……」

……ぶむゆり。

(わっ——柔らかくて……でも、ちょっとキツいみたい……！)

キララ自身は初めて体験する、胸奉仕。

柔らかいバストで左右から包まれて、吸い付くような乳肌に、勃起全体が気持ちよい圧迫を受ける。重さを感じる密着感が、女体の柔軟さを感じさせた。

挟みきれない亀頭部分は、谷間から雄々しく突き出している。メイド少女の鼻先にも触れそうなほど、接近を見せていた。

「あん……ご主人様が……こんなに、近く……」

女性の本能なのだろうか。自分の胸から突き付けられる男性器に対し、服従するような視線を捧げている、強気なキララ。

そして少女は、自身の乳房の征服者に、従順な愛撫を施し始めた。

「こうして……ん、ん、ん……」

両掌で支えた温かい乳脂肪を、上半身を使って上下させる。密着する乳肌で摩擦をされると、七太のペニスにジリジリとした媚快感が走り始めた。

——ぬるりゆ、にゆるゆっちや、つるりゆ。

「ふくく……っ！」

性感で菌を食い縛る少年。少女は更に、だいたんな奉仕を施してくる。

「もっと……私で、気持ちよくなってください……」

そう言つて、キララは鼻先の勃起に、サクランボのような唇を捧げた。

——ちゅ……。

「あっ——っ！」

更に、ためらいながら舌を伸ばして、亀頭部を小さく舐める。そのまま目を閉じて、七太の勃起を唇に含んでゆく。

「ペロ……んぷくっ——！」

「んんっ——っ！」



ぬるり、と唇に挟まれて、更に口内へと含まれてゆく。乳房愛撫で根本まで包まれながら、亀頭部は完全に呑み込まれた。

豊乳摩擦と同時の、唇奉仕。体勢的にもちよつと苦しそうだ。

「だ、大丈夫ですか」

「んふ……ふあい」

七太の問いかけに、キララは嬉しそうな返答をする。そしてお嬢様メイドが肢体を上下させると、乳房と唇による同時刺激が開始された。

——にゆるぶ、ふるゆりゆ……くぶちゆ、ちゆうつぶ……。

本体を根本まで乳房に包まれながら、亀頭部分は唇で吸引される。キララの口の中は熱くて濡れていて、触れる口内粘膜の全てが、ヌルリと滑って心地いい。

(このままじゃ……すぐ、出そう……！)

唇でカリ部分の裏側を刺激されながら、舌で亀頭部の弱い裏側を責められる。スジ部分と鈴口を舌往復されると、腰の奥で急速に力が溜められてゆく。

「このまま、では……っ！」

射精が近づいてくる事を少女に告げると、ペニスが一段と硬さを増す。

しかしお嬢様はそれらを喜びの合図と受け取ったのか、更に舌と乳房での奉仕を強めてきた。

「んっんっ……んは、んふん……！」

——ぷるっにゆるぷっしゆるりゅっ、ちゅっちゅくぶっ、れろっちゅうっちゅぷっ！

上下摩擦の速度が上がり、唇の締め付けも強くなる。動きが拙いのが、逆に焦らされて気持ちいい。

裏側を舐め往復されると腰が震えて、少年はペニスの感触だけに支配されてゆく。

キララは七太のためだけに、本などを読んで、勉強してくれていたのだ。

（僕のために、こんなに……）

そう思うと嬉しくて、とても健気で愛おしい。

思わず髪を撫でると、お嬢様は応えるように、更に強く亀頭部を吸い上げた。

——ちゅううう………！

（あっ——まずいっ……！）

一際強い快感で、ペニスから腰の中心までが貫通される。下腹部にグッと力が集まる。

そして少年の射精欲が、お嬢様に向かって爆発させられた。

「でっ出ますっ——あうくっ！」

「んへ？ んぷっ——きゃあっ！」

——っつどぶゅうううううっんっ、びゅびゅっどぶゅううっ！

射精の予告を読みとれなかった少女は、口内の発射に驚く。そして唇を離れた拍子に、

(静香さん……乳首、固くなってる……)

「あ…な、七太様…！」

ご主人様の視線を敏感に感じ取ったボーイッシュな少女は、羞恥に頬を染めながらも、視線を遮る事はしない。

しかし恥ずかしさに身をよじって、フルンと揺れる乳房を見せられると、七太はもうこれ以上、我慢が出来なくなった。

「静香さん、欲しいです…！」

女体を知って一週間もお預けをされていた少年だから、ココが野外だなんて、今はどうでもいい。

ただ、この三人の少女とセックスがしたい――。

そして意を同じくするメイドたちも、笑顔で応えた。

「はいっ――七太様の、望むままに…！」

そして静香は横向きのまま、ショートに指を添える。左の腰をスルリと滑らせ、下着からゆっくりと、左足だけを抜く。

それでもお嬢様は美脚を折って、器用に秘処を隠す。左半分だけが裸になって突き出された少女のお尻は、ツルンと艶を魅せていて、扇情的だ。

「お尻、エッチです」

見えないその奥へと、意識を集中させられてしまう。七太は隠す足首を掴むと、興奮しながら極力丁寧な、メイド少女の脚を開脚させた。

「あ……そんな……！」

少女らしい、羞恥のわずかな抵抗を残して、白い脚が大きく開かれる。自分に向かって静香の全てが、限界まで拡げて晒された格好だ。

右腿付け根には、脱ぎ掛けのショーツが絡まっている。

「は、はずっ——かしいっ、です……！」

自分の手で女性の脚を開いて、朱い秘裂を公開させている。こんな事は初めてだ。しかも周りは、陽の射す野外。

(すごく、ヤらしい事をしている)

異質な状況での行為に、そんな意識も頭をよぎる。そして更に、興奮が高められてゆくの解る。

少年に向けられたお嬢様の秘処は、既に蜜を含んでいた。いつもは閉じられている柔割れは、薄く開いて粘膜を見せるほど、少年の剛棒を待ち望んでいる。

割れ目に視線が集中すると、すぐ隣の後孔が、共にヒュクつとわなないた。

「このまま……！」

無意識に欲求を口にしながら、七太はヒザ立ち歩きで静香に腰を寄せる。少女の右足を

またぎ、ヒザを曲げた左足を胸に抱く。

腰を引いた姿勢で、濡れた膣孔にペニスの先を密着させる。柔らかくて朱い濡れ粘膜は、勃起以上に熱かった。

「んんっ——な、ななっ……七太っ、様……！」

ヒザを抱かれた姿勢のために、静香は更に限界以上にまで、開脚させられている。恥ずかしくて仕方がないのか、どもりもいつも以上だ。

でもそんなところも、愛おしい——。

「可愛いです、静香さん」

そう言つて、少年は少しずつ腰を進めた。

——ちぶ、つぶちゅ……。

「はああっ——なな、た……さまあ……！」

数日ぶりの挿入に、少女はスレンダーな肢体をプルッと震わせる。白い指を強く握つて、数本の草をプチプチと引きちぎっていた。

勃起を押し込められた膣道は、まるで待ちわびて歓迎するかのよう、粒に覆われた壁でキツく抱きしめてくれる。白い肌を透明な汗が、いく筋か流れた。

「あつくて、キツイ……！」

龟头部を突き入れ、本体を押し込んで、根本までタップリと挿入する。

——りゅつぷ…ちぷつぷ…ちゅぷちゅ…!

「ひはっ——お、おく…!」

亀頭部に当たる少し固いザラつきは、子宮の入口だ。新たな箇所を肉突きされると、粘膜は粘度の高い愛蜜を更に溢れさせた。

太くて熱い存在感で奥まで満たされたお嬢様は、涙目で笑みを浮かべている。

そして熱腔に埋まる男性器は、鼓動に合わせたリズムミカルな包容で刺激をされた。挿入した事で理性はやや落ち着いたものの、本能は更に射精欲を溜められてゆく。

「気持ち、いい…!」

一言だけこぼすと、もう少年は本能に突き動かされるまま、ペニスの抽送を開始した。数回だけゆっくりと、そしてすぐに、ストロークが速くなる。

——つゅぷぷ…つぷちゅぷ…ぢゅぷつゅるぷつにゅぶぢゅぶちゅつ!

抱いた少女の脚を軸に、ひたすら腰を打ち付ける。少年の肉体はほぼ一週間ぶりの女体に歓喜し、ただ射精に向かって突き進んでゆく。

いく度かの浅い抽送をして、深い突き込みで子宮の入口を軽く突く。

そして突き込まれる静香の女体も、男性特有の力強さに、震えるほどの喜びを味わっていた。

「あっあっ——な、七太っ様…:は、はげしっひいいっ——はっはああ…!」

縋りつくように両掌で草を握りしめて、上気した頬を手の甲に乗せている。腰打ちを受ける少女尻が柔軟に波打ち、女性らしい柔らかさを見せ付けていた。

突かれる子宮の入口は、今まで以上に切ない性感を感じるようだ。少女の肩やまぶたが物欲しそうに、弱々しく垂れる。

隆壁は少年の勃起を吸い付き包み、射精に向かって導いてゆく。

そして静香以外のメイド二人も、ご主人様への奉仕を欠かさない。

「七太様……私も……」

背後からキララに抱きしめられると、ビスチェ越しの柔らかい双乳が背中に押し当てられる。

指先で乳首を撫でられながら、更にうなじや背筋を、濡れた舌でツツ…と舐められた。

「ふひ……キララさん……」

背筋と乳首を同時に責められると、上半身全体が皮膚の下で、ピリピリと甘電させられる。

更に前方には、百合奈が位置する。

「うふふ……七太様……」

頬を染めて、蕩けるような笑顔のお嬢様は、七太の頬をそつと取ると、艶々の唇を重ねてきた。優しく吸って静かに割ると、更に熱い舌を絡める百合奈。



「んん……ちゅぶ、ペロ……」

タレ目のメイドさんは、まるで美味しい樹液を味わうかのように、少年の口内に舌を這わせる。唾液を吸い取り、更に七太の舌を啜えながら、コクリと飲み込む。

「おいしいですう……ちゅ……ちゅ……ぷちゅる……」

ヌル濡れる舌で、上顎や舌が舐められて、ミントのようないい香りもする。唇が重なる柔らかさも、官能的だ。

(早く、イきたいい……っ！)

理性の全てが女体で支配されると、もう欲求に歯止めが利かなくなる。ただ肉体が絶頂を求め、抽送が更に加速した。

——つぢよぶつちゅにゆるぶつ、ちゅぶづゅぶぢゅつちゅぶつぢゅぶつ！

「あつあつあつあつ——な、ななっ……七太っ様はっ……！」

激しくなった突き込みに、静香は全身を揺すられている。

揃えられたショートカットがサラサラと揺れて、不意にめくれる極薄いブラ。

片方だけこぼれた丸い乳房が、フルフルと前後に揺れて、抽送の激しさを表していた。

抱きしめた脚のヒザから先が、力無くフラフラと前後する。

少年は、ペニスで、背中と乳首で、そして口内で、女体の熱さと柔らかさを実感していた。激しい突き込みで、静香の膣孔が更に勃起を抱きしめる。

(こ、このまま……っ！)

全身の性感が一つに混ざって、ペニスが一段と固さを増す。肌の感触以外の全てが遠退き、すぐ目の前にまで絶頂が近づく。

「もう、イクっ……！」

思わず告げたと同時に、メイド少女も応える。

「シズ、カもっ——あっ、ふああんっ……イイきっ、ますううっ……！」

白い肌が桜に染まり、更に膣壁がキツく抱きしめた瞬間、七太の意識も真っ白になった。

「イクっ——っ！」

静香の脚を抱きながら、強くペニスを突き込む。

——っつづぶちゅっつ！

そして同時に、達する二人。

「くううっ……っ!!」

「ひっ——ひはあっ……イイっイきまつ——あああっ……イきますうううっ……っ!!」

お嬢様の膣壁が、キュウウっつと締まる。くびれた腰に力が籠もり、そのまま全身が痙攣する。

少年の目の中が発光して、一瞬だけ意識が天を飛ぶ。そして快感の証が、ペニスの奥から膣内へと、強く放たれた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!
- 期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

